

防災・震災対策調査特別委員会
視察報告書

視察日：令和7年12月18日(木)～19日(金)

視察先：石川県珠洲市、輪島市

令和8年1月

目 次

第 1 部 視察にあたって

1. 視察実施までの経緯	1
2. 目的と視察項目	1
3. 視察地	2

第 2 部 視察内容

1. 珠洲市内各地 視察の概要	4
2. 珠洲市役所 防災危機管理室 視察の概要	17
3. 公益社団法人ピースボート災害支援センター(PBV) 視察の概要 (輪島市)	32

第 3 部 視察成果のまとめ

各委員の報告	52
視察行程	62

第1部 視察にあたって

1. 視察実施までの経緯

- 令和7年 5月28日 防災・震災対策調査特別委員会正副委員長の互選を行い、星京子委員長、北岡あや子副委員長が選任される。
- 6月 5日 委員会の調査に資するものがあると判断された場合には、視察を行うことを確認する。
- 9月 3日 視察先及び視察の概要について、正副委員長案のとおり決定する。
- 10月28日 視察行程について、正副委員長案のとおり了承する。
- 12月 9日 視察行程の一部変更について、正副委員長案のとおり了承する。
- 12月18日 視察地へ出発する。(羽田空港集合・総勢13名)

2. 目的と視察項目

◆ 目的

令和6年元日に発生した能登半島地震、同年9月に豪雨災害と二度にわたり大きな被害を受けた珠洲市、輪島市を視察し、被害や復興の状況を確認するとともに、自治体職員、支援団体職員、住民などに複合災害の状況などについて生の声を聞くことにより、被災時の実態及び本区に活かせる効果的事例や諸課題を正しく把握し、今後の豊島区における災害対策に資することを目的とする。

◆ 視察項目

(1) 石川県 珠洲市

- ①珠洲市内各地（現地視察）
- ②珠洲市役所 危機管理室（座学）

(2) 石川県 輪島市

- ①支援団体・公益社団法人ピースボート災害支援センター（座学）
- ②輪島市内各地（現地視察）

3. 視察地

(1) 珠洲市

珠洲市（すずし）は、1954年（昭和29年）珠洲群宝立町、飯田町、正院町、上戸村、若山村、直村、蛸島村、三崎村及び西海村の区域をもって珠洲市となった石川県下5番目の市である。

本州のほぼ中央から日本海に突き出た能登半島の最先端に位置し、市域の三方は海に囲まれ、輪島市、能登町に隣接し、県庁所在地である金沢市からは約140kmの地点にある。

令和7年4月1日現在の人口は11,081人で、本州にある市の中で最も人口が少なく、65歳以上が人口比の50%以上を占めている。

令和6年能登半島地震では、震度6強を観測し、市内の避難者数は7,000人を超え、同年9月の奥能登豪雨と合わせ、住宅被害は5,900棟を超え、水道、道路、河川、海岸等が大きな被害を受けた。

現在、里山里海をベースに、アートや先駆的な技術を取り入れた、強靱で安全な地域づくりや生産性の高い生業づくりを目指し、復興に取り組んでいる。

(2) 輪島市（支援団体・公益社団法人ピースボート災害支援センター）

ピースボート災害支援センター（PBV）は、被災地での災害支援活動や災害に強い社会づくりに取り組む公益法人である。

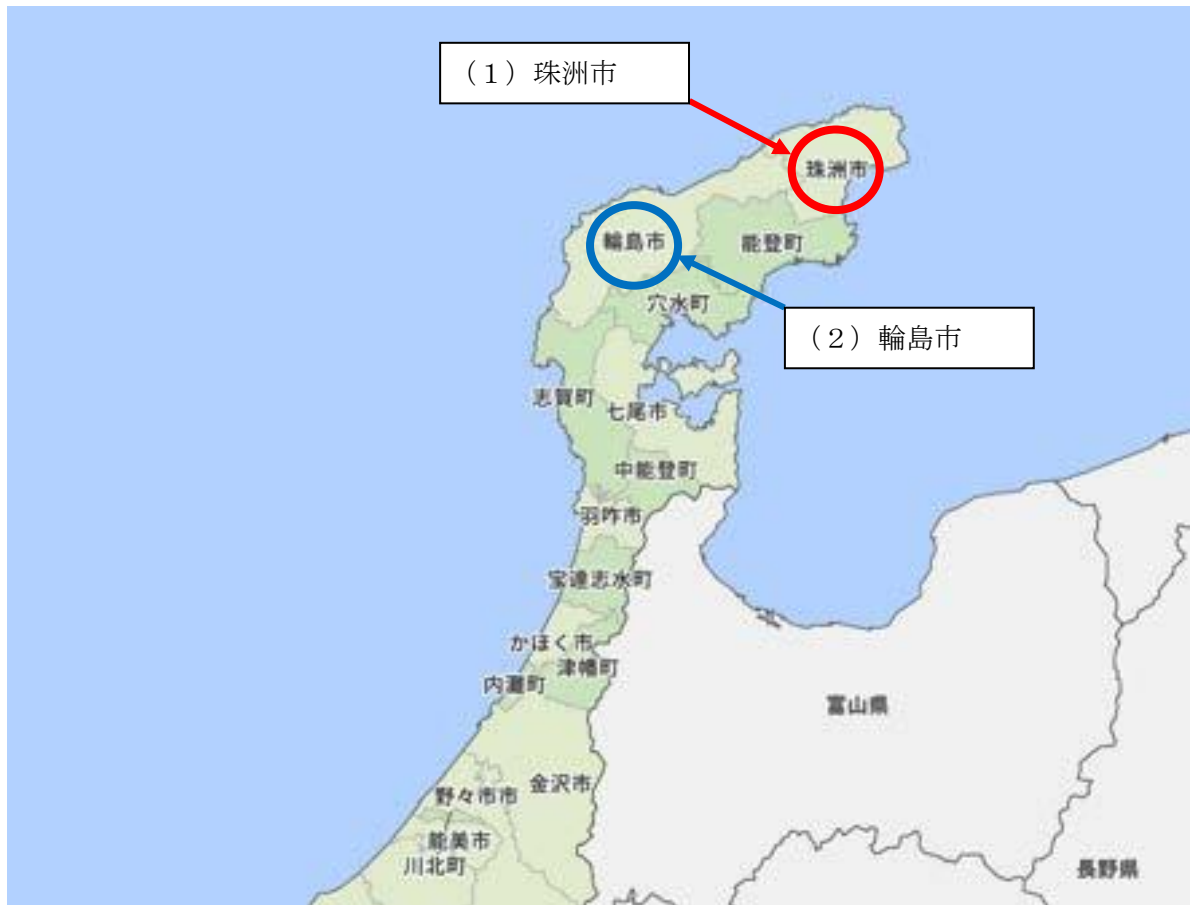
2011年の東日本大震災を契機に設立され、日本各地の風水害や地震被害などで緊急支援を行うほか、国際ネットワークを活かした海外での支援活動も展開している。また、これまでの経験を活かし、防災・減災教育による人材育成等にも取り組んでいる。

令和6年能登半島地震では、輪島市より要請を受けて、避難所・避難生活のコーディネーションを開始。総括支援や対口支援チーム、医療チーム等と連携を図るとともに、過去の災害で得た知識や経験を活かし避難所運営支援や物資調達、入浴支援などを行い、避難所の閉所後も仮設住宅入居者への家電支援、各種支援調整窓口の運営、被災者のコミュニティ支援など、輪島市に寄り添った総合的な支援を行っている。令和7年8月には、輪島市と「包括連携協定」を締結した。

※輪島市は、令和6年能登半島地震では、最大震度7を観測し、避難者数は13,000人を超え、同年9月の奥能登豪雨と合わせ、住宅被害は11,000棟を超え、水道、道路、河川、海岸等が大きな被害を受けた。

現在、単に被災前の姿に戻すだけではなく、もともとあった課題を踏まえ、「もとよりもっと 新・輪島」のスローガンのもと、これまで以上に魅力的で豊かで安心して暮らせる輪島市を目指し、復興に取り組んでいる。

【位置図】



第2部 視察内容

1. 珠洲市内各地 視察の概要

(対応者) リポート珠洲合同会社 代表	篠原 和彦 氏
リポート珠洲合同会社	宮口 智美 氏
珠洲市消防団鶴飼分団長	高 重幸 氏
珠洲市宝立小中学校指定避難所本部長	多田 進郎 氏

1 リポート珠洲・石川県能登半島地震復興支援ガイドツアー

能登半島地震で特に被害が大きかった珠洲市宝立町（ほうりゅうまち）鶴島・鶴飼（うしま・うかい）地区。地盤沈下や津波被害に見舞われ今は更地となった各現場、宝立小中学校指定避難所などを、被災者でもあるリポート珠洲合同会社のガイドから地震発生時から現在に至るまでの状況を聞きながら巡るとともに、あさひ自主避難所にて、珠洲市消防団鶴飼分団長、宝立小中学校指定避難所本部長から、発災直後の対応状況や避難所運営などについて当事者の生の声を伺った。



リポート珠洲合同会社代表 篠原 和彦氏より視察先についての説明を受ける

2 珠州市内各地 現地視察

■見附島

能登のシンボルとして有名な「見附島」。島の形が軍艦に似ているところから別名「軍艦島」とも呼ばれていたが、地震により一部が崩落。

浜辺には縁結びの鐘があり、「えんむすび一ち」として観光客に親しまれていたが、地震の影響で砂浜はほとんどがなくなり、縁結びの鐘は足元が崩れ近づけない状態であった。



見附島視察



被災前の見附島と縁結びの鐘



視察時の見附島と縁結びの鐘



被災前の見附島海岸



視察時の見附島海岸

見附島には、令和7年8月に新たなモニュメント「ニンフィア with LOVE」が設置され、復興に向けた新たな動きも見受けられた。



石川県との包括連携協定に基づき、一般財団法人ポケモン・ウィズ・ユー財団が観光振興に関する取り組みとして設置したモニュメント



入札不調で工事の施工業者が決まらない公共施設



見附島前にて

■宝立町鵜島・鵜飼地区

能登半島地震で特に被害が大きかった珠洲市宝立町(ほうりゅうまち)鵜島・鵜飼(うしま・うかい)地区。液状化による地盤沈下により、マンホールが1.5m近く飛び出し、橋の横の地盤は1mほど下がり砂利で埋められ、海水が河川に流入し濁っており、電柱は傾いてしまった状態のままであった。



鵜飼港岸にて説明を受ける





隆起したマンホール





傾いたままの電柱及び道路の亀裂



傾いたままの電柱及び道路の亀裂



陥没した道路



傾いたままの電柱



橋の横の地盤が沈下し砂利で埋められている

■宝立小中学校指定避難所

宝立小中学校指定避難所にて、避難時の対応状況や炊き出しの様子、避難所での生活の実態などについて、当時の写真を見ながら説明を受けた。



宝立小中学校指定避難所にて説明を受ける



篠原代表の説明



宮口氏の説明

3 あさひ自主避難所での講話

あさひ自主避難所にて、消防団の副分団長（当時）として鶴飼地区で救助活動などに携わった高重幸氏、最大800人が避難した珠洲市立宝立小中学校で宝立町の自主防災組織の本部長として避難所の運営にあたった多田進郎氏から、マニュアルが通用しない実際の現場で起きたリアルなお話を当時の映像や写真など見ながら伺った。

■珠洲市消防団鶴飼分団長 高重幸氏の講話



高氏の講話



写真を見ながら説明



質疑応答

質疑応答

質問 震災当日、電気はつかない状態であったか。

回答 電気も水道も全部アウトであった。

ここ、あさひ自主避難所もしくはは発電機を使用しており、この近くに私が勤めている会社があるが、1月14、15日まで電気は使用できない状態であった。

また、津波火災も起きたが、消火栓は使えなかった。今現在も町内に20数か所使えないままの消火栓が残っている。津波火災時は、何とか防火水槽から水をとって火を消した。消防団の分団のポンプ車は瓦礫の真ん中に待機所があったために出せず、隣町の消防分団と、消防署から来た人間で一緒になって火を消した。

質問 15人の消防団員の方がいたとのことであるが、指示系統は。

回答 実際には部隊活動はできなかった。まず車で家から出れなかった。また、携帯電話がほぼつながりにくくなってしまっており、1日1日のあのときは、近所の団員たちが自然にできたグループで活動をしてくれた。当時、私は副分団長だったが、分団長と私などで少ないながらつながった電話で「誰と誰と誰がこのあたりにいるからそのまま活動やってくれ」という形だった。団員は、誰の命令でもなく、使命感だけで動いていた。

家に挟まれた方などの情報は1月1日の深夜になるまでは近所以外は分からなかった。実際に私がこの町内を走りまわったときは、家に一緒にいた家族がいれば誰がけがをされたか、挟まれてるかが分かる。あとは、ふだん一緒に住んでいなくても、地震で揺れている途中までお父さんお母さんと連絡がつながったけれども、そのあとつながらなくなったということが、珠洲消防署に連絡が入ってきて、そこから私のところに連絡が入り、見てこい、と。つらい話だが、見てきて、出せたら出してこいと。無理なら電話しろという、そういうことの繰り返しであった。

質問 珠洲市消防団の皆さんは、消防署員と同じような活動を常時されているのか。

回答 ふだんの災害訓練はレスキュー隊が助けた人を担架に乗せて運ぶぐらいであった。瓦礫の中や潰れた家から人を出すような訓練をやったことはなかった。ただ、ここは田舎なのでチェーンソーを家に持っている方が普通におり、家のチェーンソーを持ち出して一軒一軒走ってまわった。私が消防署からあるところに行ってくれと言われて行った家は1階が潰れていて、2階の窓が開いていた。何とかよじ登って2階に入ったら、フローリングに大きな穴があけてあり、すでに救助されていたというケースもあった。

■ 珠洲市宝立小中学校指定避難所本部長 多田 進郎氏の講話



多田氏の講話



資料を見ながら説明



質疑応答

質疑応答

質問 発災の当日の夜は電気も何もない中で実際どういう状況であったのか。

回答 一人一人が茫然、不安だった。その中で避難し、ここにいれば寒さはしのげると言っていたが、あしたから食べていけるのか、あした地震は終わるのか、津波は大丈夫なのかと、いろんな思いで頭の中はぐちゃぐちゃであった。

質問 震災後、電話もほとんどつながらない中での緊急時の対応や避難所の体制づくり、組織づくりが本当にすばらしかった。日頃の訓練がすごいのか。

それとも、もともと災害のプロフェッショナルとして何かやっていたのか。

回答 集まったみんなには、避難所の設営・運営の経験はなかった。私自身もその経験はないが、学校の校長をした経験があり、班を作るのは学校教育の延長線ではあった。それで、たまたま自主防災組織の本部長というのは区長会の会長になるという規約があり、運営するに当たっては、私が一応本部長になるんだろうなど、自然と自分がやるしかないと思った。集まった人の中でチームをつくり運営していかなければいけない中、どんなチームをつくるか考えたとき、避難所に区長がいたら、まず区長に声をかけた。次に、いずれ医療チームが後から来るが、それまでに熱などがでたらどうしようと考え看護師を探した。それから炊き出しをやっていくときには保存物資もあり後から支援も来るが、1月2日の午前は天気が良かったし、正月ということもあり、危険でなければ家に帰って、家の冷蔵庫からとにかく食べ物を持ってきてくれと頼んだ。それをみんなでシェアしようと言った。とにかく今何が集まるかということを考えて。先ほど消防団分団長から使命感という言葉があったが、やはりみんな区長をやっている以上は、その地区を越えて宝立町のために頑張ろうという、そんな人が多かった。

質問 顔の見える関係があると思うが、避難所の中で自己主張による衝突など、もめごとなどはあったか。避難所運営で一番困ったことは。

回答 一例を挙げると、暑くなってきたら、自分の子どもに冷たいジュースを飲ませたいので冷蔵庫を置いていいかと言われた。私は、駄目ですと答えた。一人一人が冷蔵庫を持ってきたら、学校の電源はすぐにパンクしてしまう。だからそういうことは許されませんよと言わなければいけない。そういったことで嫌われた部分もある。しかし、通すところは通していかないといけない。人間関係が近いことが逆に壁になる、障害になるということはある。

質問 役場とは、避難所運営についてどのようなやりとりがあったのか。

回答 避難所の運営に関して、役場の人間には、現場を知らないでこれをこうしてくれと言ったって駄目だと、言う前に現場を見に来てくれと話した。

2. 珠洲市役所 防災危機管理室 視察の概要

(冒頭挨拶)	珠洲市議会議長	番匠 雅典 氏
(対応者)	珠洲市長	泉谷 満寿裕 氏
	珠洲市議会事務局長	端根 優子 氏
	珠洲市総務課危機管理室長	女田 良明 氏



番匠珠洲市議会議長 挨拶



泉谷珠洲市長 挨拶



星委員長 挨拶



藤澤委員(副議長) 挨拶



泉谷珠洲市長より説明を受ける



女田危機管理室長より説明を受ける

■能登半島地震の被害状況

令和6年
能登半島地震

被害状況


珠洲市
UMAZU CITY

	人数（内訳）
死者	158人 <small>県道死者97人 災害関連死者91人</small>
重傷者	47人
軽傷者	202人

令和7年10月15日現在

	箇所数・人数
避難所数	0箇所
避難者数	0人

※令和6年12月27日全て閉鎖

- 当日は、元旦であり、帰省客が多かった。
- 避難所は、94カ所、避難者7,000人以上
指定避難所26カ所中、15カ所を使用
（11箇所は被災のため使用できなかった）
指定避難所以外の79カ所は、地区集会所や農業用
倉庫など
- 上記については、被災後に徐々に分かってきたこと
であり、発災当初はどこに、何人ぐらいの避難者が
いるのかは、分からなかった



<建物被害>

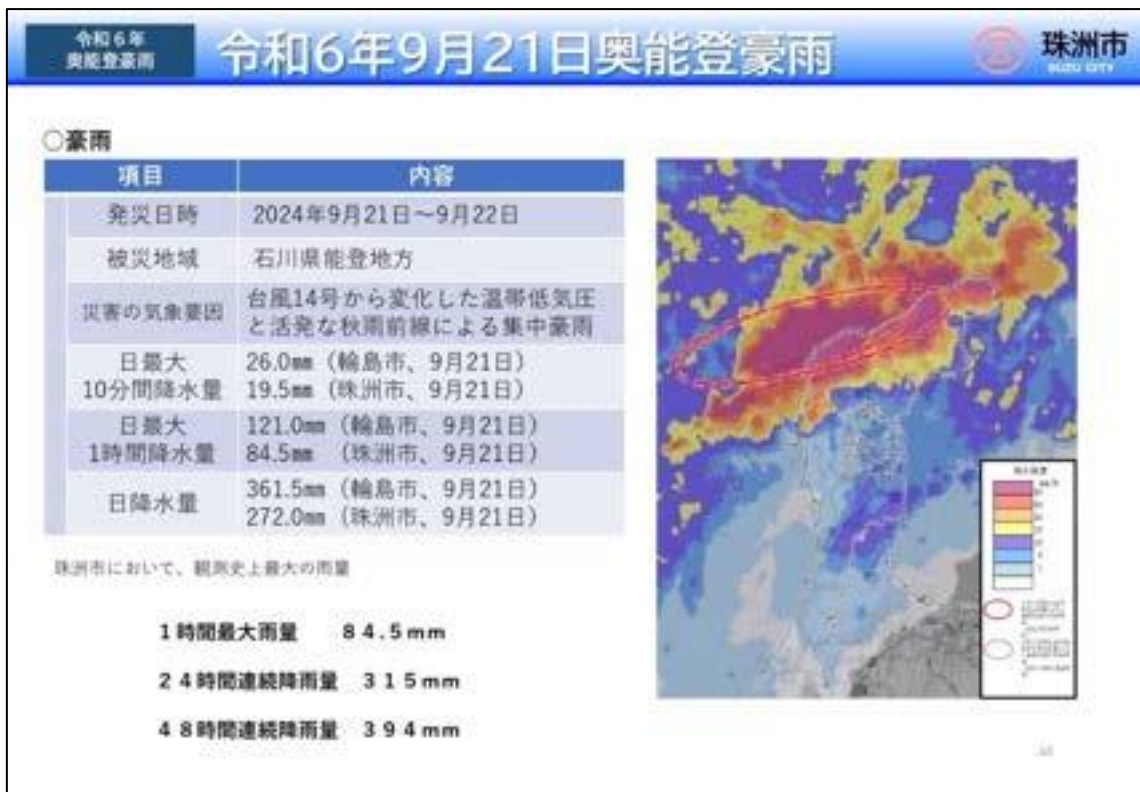
※7,11,28棟の件数	世帯	非住家	合計
全 壊	1,756	3,879	5,635
半 壊	2,110	2,793	4,903
大規模半壊	417	410	827
中規模半壊	524	590	1,114
半壊	1,169	1,793	2,962
一部損壊	1,747	3,000	4,747
準半壊	886	930	1,816
準半壊に至らない	861	2,070	2,931
被害棟数合計	5,613	9,672	15,285
無被害	50	255	305
総合計	5,663	9,927	15,590

- 公費解体の申請は、「特定非常災害」に指定されたことから、半壊以上の建物が対象（非住家もOK）
- 被災前の世帯数が約5,800世帯であり、半壊以上の公費解体は、その半分相当になる見込み
- 令和5年5月5日の奥能登地震の修理が完了した直後の被災もあった。

公費解体の申請状況（※7,10,27棟の）	
申請受付 件数	5,603件
申請受付 棟数	8,458棟 <small>〔住 家〕2,819棟 〔非住家〕5,639棟</small>

11月27日現在
8,303棟解体完了（98.2%）

■奥能登豪雨の被害状況



■能登半島地震発災時の対応

泉谷珠洲市長

地震発生直後、混乱した中で真っ先にしたことは、石川県知事の馳知事に連絡し、自衛隊の派遣を要請した。まともに建っている家が10分の1ほどしかなく、残りは全壊かほぼ全壊で壊滅的な状況です、と。そして、もう一つは、防災ヘリを飛ばし、上空から大規模な土砂災害が発生していないかの確認を要請したが、日没が早かったため、地震発生当日に防災ヘリは飛ばなかった。さらに津波もあった。こうした混乱した状況の中で各地区の区長などに連絡して、できるだけ情報を集めようとしたが、電話が繋がらないところも多く、なかなか状況の把握ができなかった。

女田危機管理室長

1月3日から(市長・副市長は1月1日から)市長、副市長、危機管理室長、国交省、内閣府防災担当、総務省リエゾン、石川県リエゾン、警察リエゾン、消防署リエゾン、自衛隊リエゾンが危機管理室一室にまとまって対応にあたった。危機管理室に情報が集まってくるので、ここ1か所に全頭脳が集まり自然と全ての情報が入ってくるようにした。これにより、危機管理室一室で全ての情報を聞き、その場で対応方針を決定し、各方面に迅速に指示を出すことが可能であった点は良かった。

【危機管理室内に幹部が集まる】

- ・1月1日～3月31日まで、市長・副市長は危機管理室内のテーブルにて執務
- ・テーブルには、総務省リエゾン、石川県リエゾンが同席
- ・室内には、消防・警察のリエゾンも常駐
- ・情報は、危機管理室に集まってくるので、室内で対応を協議し、指示すること、国や石川県などとの調整が迅速に行うことが出来た。

【珠洲市職員の参集状況】

- 被災直後は、市長、副市長、職員10数名(通常は、庁舎内に130名)ほとんどの職員は、家族とともに避難所へ避難し、運営を行っていた。道路が被災し、庁舎に来ること自体が不可能な職員もいた。
- 徐々に、登庁することができたので、職員は増えていった(1週間後で3割ぐらい)

【市役所も避難所に】

- 被災直後は、市役所に約300人程度が避難

【危機管理室】

- ・危機管理職員は、集まってくる情報(安否不明、避難所の場所と人数、孤立集落の状況などを整理)

令和6年1月3日 PM5:56 危機管理室内



■全体会議

災害対策本部は珠洲市の内部のみの会議となるため自衛隊や警察は入っていない。そこで、自衛隊や警察なども含めて連絡調整する全体会議を1月4日の夜から実施した。その日更新されたデータの資料を夜中にまとめ、朝の午前7時から1回目、日中に変わったデータをまとめ、夜の午後7時に2回目の会議を実施し、次の日にやることを話し合った。

令和6年
能登半島地震

珠洲市
SUZUSHI CITY



市長、副市長
内閣府
総務省
石川県
国土交通省
自衛隊
警察
消防
愛媛県
PWJ

<対口支援>
浜松市
福井県
千葉県
熊本市

1月中旬 全体会議（応接室） 1/4～2週間くらいは午前7時と午後7時の1日2回
1月中旬からは、午後7時の1日1回

■能登半島地震における応援職員の概要

<p>●応援職員（対口支援を含む）</p> <p>全国の都道府県・市町から</p> <p>101自治体 22,722人</p> <p>〔 23 都道府県 13,360人 78 市町 9,362人 〕</p> <p>※ほか、水道協会を通して 33団体（自治体含む）</p>	<p>●対口支援 1/3～8/4 （総務省応急対策職員派遣制度）</p> <table border="0"> <tr><td>浜松市</td><td>1,095</td></tr> <tr><td>福井県</td><td>3,413</td></tr> <tr><td>兵庫県</td><td>2,813</td></tr> <tr><td>神戸市</td><td>981</td></tr> <tr><td>千葉県</td><td>1,955</td></tr> <tr><td>山梨県</td><td>686</td></tr> <tr><td>千葉市</td><td>1,576</td></tr> <tr><td>熊本市</td><td>1,431</td></tr> <tr><td>長崎県</td><td>608</td></tr> <tr><td>大分県</td><td>162</td></tr> <tr><td>計</td><td>15,600</td></tr> </table>	浜松市	1,095	福井県	3,413	兵庫県	2,813	神戸市	981	千葉県	1,955	山梨県	686	千葉市	1,576	熊本市	1,431	長崎県	608	大分県	162	計	15,600
浜松市	1,095																						
福井県	3,413																						
兵庫県	2,813																						
神戸市	981																						
千葉県	1,955																						
山梨県	686																						
千葉市	1,576																						
熊本市	1,431																						
長崎県	608																						
大分県	162																						
計	15,600																						
<p>●珠洲市保健医療福祉調整本部と連携し、被災者の医療福祉において応援していただいた団体</p> <p>DMAT（災害派遣医療チーム） JMAT（日本医師会災害医療チーム） DPAT（災害派遣精神医療チーム） JDAT（日本災害歯科支援チーム） DHEAT（災害時健康機器管理支援チーム） DWAT（災害派遣福祉チーム） JRAT（一般社団法人 日本災害リハビリテーション支援協会） JDA-DAT（日本栄養士会災害支援チーム） PWJ（空飛ぶ捜索医療団ARROWS） 日本災害看護学会 日本薬剤師会</p>																							
<p>【役割】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自衛隊・・・道路啓開、捜索、救助、物資輸送、炊出し ●警察・・・捜索、救助 ●消防・・・捜索、救助、孤立集落対応 ●総務省・・・本省や石川県との調整 ●石川県・・・国などとの調整 ●対口支援・・・浜松市、山梨県（物資の管理、受入配送調整） 福井県、兵庫県、千葉県、神戸市、熊本市（避難所の運営） 千葉市（り災証明書） 長崎県、大分県（被災家屋調査） <p>●応援職員</p> <p>【各機関の業務箇所】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●自衛隊は、4階の会議室 ●3階会議室（危機管理室となり）に、内閣府防災・石川県・経済産業省・国土交通省・浜松市・福井県・千葉県・熊本市が業務 ●業務する場所が不足し、廊下などにテーブルを置いて業務することも ●寝る場所は、車両や会議室、廊下などにごろ寝状態 																							

■能登半島地震直後の市内の状況

【発災直後の市内の状況】

●市内全域断水

- ・市内5カ所の浄水場が稼働停止し、管路も被害を受け全戸断水
- ・市内では、市役所周辺が最初に給水開始（3月10日）
- ・以降、避難所や福祉施設などを優先的に給水開始

●市内のほとんどが停電

- ・市役所は停電し、自家発電設備を稼働し、危機管理室の一部の電源のみ使用可。燃料は、約8時間分のため、復電まで数回にわたって、消防署の備蓄燃料をもらい、補充した。
- ・市役所は1月2日昼ごろに復電。避難所や物資拠点を優先して電力復旧を進める。

●仮設トイレ

- ・仮設トイレを避難所などに配置（1月4日～順次）

●道路が被災し、通行できない箇所多数

- ・市内管内図に、通行可能な道路や通行止め箇所を記入したものを全体で共有した。道路啓開や応急復旧などの状況を毎日、更新。

●ガソリンスタンド

- ・従業員の被災や停電のため、通常のガソリンスタンドは、使用できない。
- ・災害時対応の1箇所のみ、道路啓開作業重機などのために稼働

30

【通信の状況】

- ・停電のため、固定電話は、不通
- ・携帯電話キャリアの基地局は、停電後バッテリーで7～8時間持つが、それ以後は、電波がなくなるため、不通となった。
- ・衛星電話を総務省から借り、避難所に配布した。（自衛隊に物資とともに配布した）
- ・衛星電話は、使い方が特殊である、地理的条件により使用できない、1人しか使用できない。
- ・その後、スターリンクが総務省などから送られてきて、避難所に配備した。数十名が同時に使用することができ、LINEによる連絡や通話が可能である。

【水や食料】

- ・石川県の被害想定により、1,000人×3食×3日=9,000食分の水と食料を各指定避難所や防災倉庫に備蓄していた。
- ・しかし、すぐに不足した。また、正月の帰省客の中には、乳幼児が平常時よりたくさん避難しており、粉ミルクや哺乳瓶が不足した。
- ・正月なので、自宅に食糧があり、冬季のため、保存がきいたもので、避難者が自宅から持ち寄って食糧を確保していた。夏場の被災なら、どうなっていたらうか？

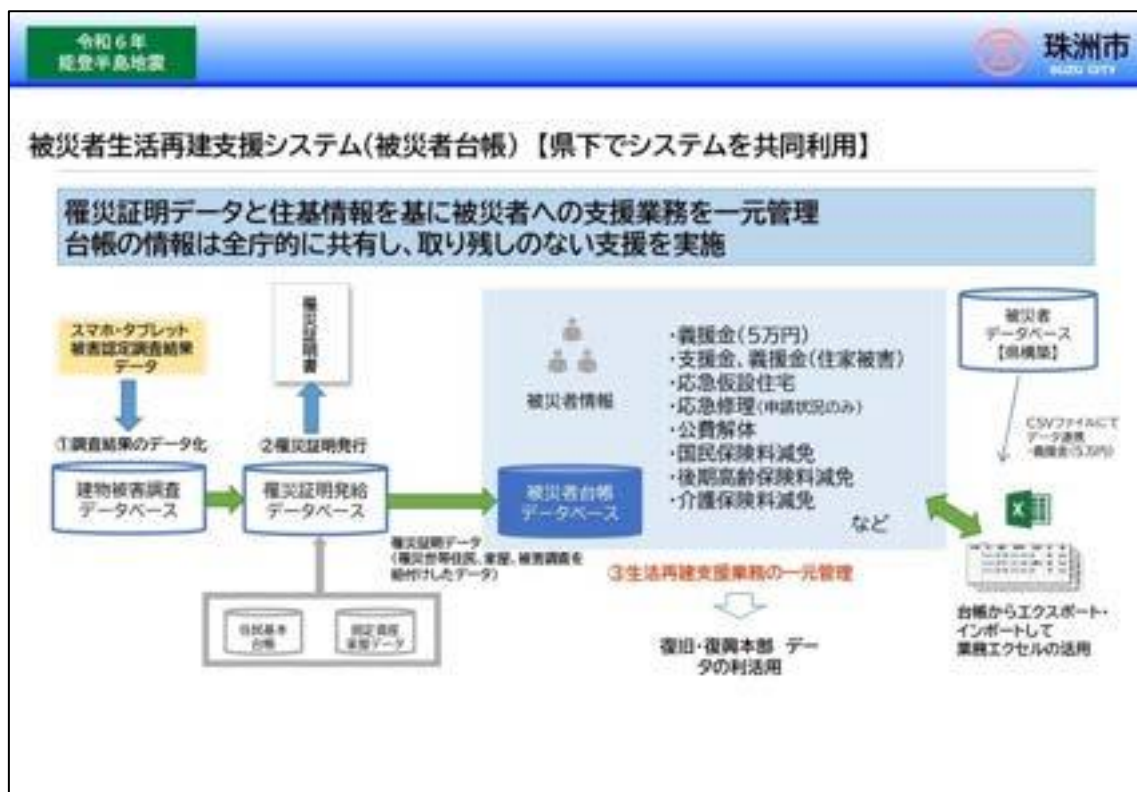
31

■被災者生活再建支援システム

建物被害調査は、昔は現場に行き、調査する際、紙に点数をつけて、測って、写真を撮って、その写真を印刷して作業していた。今のシステムでは、タブレットを持っていき、タブレットで写真を撮り、タブレットに住宅地図が入っているため、タブレットの地図上で調査した家屋の場所を選択すると、そのままシステムに入る。印刷も何も必要なく、その場で登録が可能。写真も記録もシステムに登録されるため、例えば屋根が壊れている、壁が壊れているなど、その場で全て点数をつけて保存し、ペーパーレスかつその場で調査を終えることができる。今のシステムは、1月1日以前にも使ったことがあり、1月1日の時は数が多いが、このシステムを活用した調査を繰り返し行った。罹災証明の発行も、システムを利用して結果をただデータで出すだけであり、素早く対応することができた。

能登半島地震の際は、申請を受け付けてから動くのでは遅くなるため、罹災証明をプッシュ型で行った。調査員がタブレットを持ち、珠州市全域をローラーで全てチェックし、調査が終わった家にはバーコードをつけ、それを剥がして持ってくるとすぐに罹災証明を渡せると案内した。

DXは日々進化している。システムで行うことで間違いも減る。最初からどう紐づけておくかが重要である。



■珠洲市復興計画

令和6年
能登半島地震

復興計画 基本的な考え方

珠洲市
SUZU CITY

【基本理念】

能登半島の先端に位置する本市において古から受け継がれてきた**里山里海の営みの再生をベースに**、近年取り組んできた大学と連携した人材育成事業やSDGsの推進、トキの放鳥に向けた取り組み、日本中央競馬会の引退競走馬を活かす取り組み、奥能登国際芸術祭などを復興への光として、**アートや先駆的な技術を取り入れ**、さらに次の世代に引き継ぐことのできる、より**強靱で安全な新たな地域づくり**、より**生産性の高い生業（なりわい）づくり**を目指す。

【復興への進め方】

市民の皆様や関係の皆様とともに考え、議論し、誰一人取り残すことのない**持続可能な復興**に向けて連携して進めていく。

本市の取り組みが、今後の我が国のあり方を指し示すこととなるよう、**魅力ある最先端の復興**を成し遂げる。

■珠洲市の復興支援体制



■珠洲市の復興支援体制（続き）

令和6年
能登半島地震

被災者見守り・相談支援活動（避難所）

珠洲市
SHIRASU CITY

1月3日から避難所巡回開始
避難所での診療と医療ニーズの把握目的

2月3日から避難所巡回（2回目）
長引く避難所生活による健康被害と環境確認目的
DPATによるこころのケア開始


3月7日から指定避難所健康ブース設置（5月4日まで）
珠洲市災害対応のダウンサイジング目的（平時に戻す）

4月12日から避難所巡回
避難所における環境確認及び熱中症や食中毒予防等の啓発

5月23日から建築士、弁護士等の専門相談

・
・
・

季節の移り変わりや家屋修繕・解体の進捗、心身の体調の変化による生活課題の変化（ライフラインの修繕・準備など）のタイミングで巡回



令和6年
能登半島地震

被災者見守り・相談支援活動（在宅）

珠洲市
SHIRASU CITY

1月16日から在宅全戸ローリング開始
在宅の生活状況の確認と医療ニーズの把握目的
状況把握世帯1,152/訪問世帯数5,727（20%）

2月11日から令和5年奥能登地震要フォロー者の訪問開始

2月13日から全戸ローリングで状況未確認世帯再訪問（2巡で7,320世帯）
状況確認できた世帯数1,255世帯（1,255世帯/4,705世帯 26.6%）

2月17日から75歳以上高齢者世帯 再訪問

その後も

- ・ 建築士・弁護士等の専門相談
- ・ 水道使用開始届出済世帯
- ・ 一部損壊や準半壊で仮設住宅申込済み世帯
- ・ 水害浸水被害区域
- ・ 在宅居住世帯（避難所、仮設住宅、既にフォローしている世帯を除く）

その時々テーマに沿ってローリングする


- 28 -

■災害発生時に発生する主な業務

 珠洲市 <small>SHIRASAKI CITY</small>	
【災害発生に伴う主な業務】	
● り災証明の発行	
被害建物調査	・ ・ ・ ・ ・ 税務課（被災者再建支援システムを活用）
証明書の発行	・ ・ ・ ・ ・ 市民課
● 被災者再建支援制度	・ ・ ・ ・ ・ 災害救助法対象で、制度要件をクリア 被災者再建支援法による支援金申請の周知 や申請受付と県への送付
● 市義援金の配分	・ ・ ・ ・ ・ 珠洲市への義援金の配分 配分委員会を設置し、配分額などを決定 申請受付し、振込
● 石川県義援金の配分	・ ・ ・ ・ ・ 石川県へ寄せられた義援金を県担当部署が 配分委員会を設置して、配分額などを決定 被災市町が申請受付し、振込
● 税などの減免	・ ・ ・ ・ ・ 国保、後期高齢、介護保険
● 応急修理制度	・ ・ ・ ・ ・ 環境建設課（建築）
● 応急仮設住宅	・ ・ ・ ・ ・ 環境建設課と石川県建築住宅課 入居申込の受付や入居案内と説明会
● 物資の受入・配送	・ ・ ・ ・ ・ 自衛隊に続き、民間配送事業者と契約 石川県への必要物資の発注や受入れ

 珠洲市 <small>SHIRASAKI CITY</small>	
● ボランティアセンター	・ ・ ・ ・ ・ 珠洲市社会福祉協議会 ボランティアニーズの把握とマッチング調整 石川県ボランティアセンターとの調整
● 公費解体	・ ・ ・ ・ ・ 環境建設課（環境係） 「特定非常災害」のため、半壊以上の建物が 対象となった。申請受付と設計書作成、発注 、管理、支払、スピード管理
● 避難所運営	・ ・ ・ ・ ・ 福祉課、健康増進センター 避難者の人数や状況、ニーズなどを把握し、 物資担当などに繋げる。
● 避難者の見守り	・ ・ ・ ・ ・ 健康増進センター 弁当配布や民間炊出しの調整
● 避難指示	・ ・ ・ ・ ・ 危機管理室 県や国交省などと協議し、概ね2年以上復旧 工事に期間を要するような住むことが危険な 区域の生活者に避難指示を出し、長期避難世 帯として、県が認定する。（再建支援制度）


■災害発生時に発生する主な業務（続き）

 珠洲市
TAKAZU CITY

- 水道の復旧・・・・・・・・環境建設課
日本水道協会（名古屋市）が仕切る
- 下水道の復旧・・・・・・・・環境建設課
- 道路の復旧・・・・・・・・国土交通省、石川県、環境建設課
- 災害廃棄物処理・・・・・・・・環境建設課（環境係）
集積場所の確保と受入れ、搬出
- 災害弔慰金等の支給・・・・・危機管理室
直接死への支給事務
災害関連死の認定と支給（認定審査会の設置）
マニュアルは、石川県が作成
- 災害救助法の経費・・・・・危機管理室（応急修理は建築係）
対象経費の確認と必要添付書類の準備
内閣府防災の精算監査で説明

※事務分担を事前に決めておき、研修を受けておけばどうか？

■災害時の課題と対応

 珠洲市
TAKAZU CITY

【課題と対応】

- 断水や下水道使用不可能な事態に備え、凝固剤簡易トイレを備蓄しておく。仮設トイレが配備されるまでに、相当の時間を要するため、指定避難所や公衆トイレ、市役所などの公的施設に備蓄する。
- 停電による通信機器が使用できない状態に備え、スターリンクを整備する。発電機やポータブル充電装置、ソーラーパネルなどを購入し、指定避難所に配置しておく。
- 重機や車両、発電機などの燃料の確保。どこから、燃料を停電の中、確保できるのか？ 協会や業者と確認しておくこと。
- 様々な災害対応業務の担当部署を事前に決めておき、研修を行う。
- 対口支援・応援職員の宿舎の確保



北岡副委員長挨拶



泉谷珠洲市長と珠洲市議会議場にて

3. 公益社団法人ピースボート災害支援センター（PBV） 視察の概要（輪島市）

（対応者）公益社団法人ピースボート災害支援センター 山脇 歩子 氏
公益社団法人ピースボート災害支援センター 澤田 かをり 氏



ピースボート災害支援センター 山脇氏よりPBVの概要説明を受ける



輪島市 中前総務部長が同席、輪島市とPBVの連携等について説明を受ける

1 ピースボート災害支援センターの概要及び活動

PBV 災害支援専門の非営利団体

描く未来 VISION

**人こそが
人を支援できる
ということ**

ピースボート災害支援センター（PBV）は、被災地での災害支援活動や災害に関心を持つ人々に寄り添う公益法人です。

誰しもが、自然災害に遭遇する可能性があります。国や地域を超えて、すべての人々が互いに助け合える社会を創ることが、国際に立ち向かう力になると信じています。

私たちの使命 MISSION

**「お互いさま」を
共に歩む**

いつ、どこで起こるか分からない災害は、時に私たちを被災者にし、時に私たちを支援者にもします。自分を守り、大切な人も守る。そして、少し遠くの「あの人」を支えます。PBVは、被災者や被災地域の回復のために、その文化や営みに寄り添い、支援者として自発的に関わる多様な人々の思いを具現的に「共に立つカタチ」にします。

被災地の課題解決 SOLUTION

※2024年度 PBV活動報告書を参照

ボランティア、スタッフの総活動人数 117,788人	災害ボランティアトレーニング受講者 10,033人
被災地での食事支援（炊き出し） 162,691食	家屋清掃、修繕、廃物の収集対応 4,620件
避難所の運営支援 141ヶ所	災害ボランティアセンターの運営支援 39ヶ所
仮設住宅への物資や食料の調達 39,668品	公民館・集会所のコミュニティ支援 265ヶ所

これまでに支援した延べ被災地数

海外 31か国	国内 87地域
-------------------	-------------------

実践と防災・減災のサイクル

災害時と平時。

積み重ねが災害を乗り越える力に。

平時

災害時

被害状況の調査
被災状況、被害者の状況調査
外部機関、関係行政機関
被災者、被災者へのニーズ把握調査
支援のニーズ

支援計画と体制づくり
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査

初動と緊急支援
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査

中長期的課題解決
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査

被災地
支援

防災・減災

支援の事前準備
人権や多様な文化や価値観を尊重する
ボランティアやスタッフの育成
災害発生時の対応体制づくり
災害発生時の対応体制づくり

多様なネットワーク
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査

普及啓発
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査

支援の振り返り
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査
被災地や被災者へのニーズ把握調査

※2024年度 PBV活動報告書を参照

■能登半島地震の被害状況【2025. 9. 24・15時現在】

人的被害（人）

死 者 227（うち災害関連死者 126）

行方不明者 2

重 傷 者 214

軽 傷 者 303

災害関連死者：震災による死者以外で、震災後に災害による負傷の悪化または身体的負担による疾病のため死亡した者

住家被害（棟）

全 壊 2311

半 壊 3971

一部損壊 4352

非住家被害（棟）（半壊以上） 11709

避難所の状況

避難所 0（最大 186 箇所）

避難者 0（最大 13,641 人）

（出展：輪島市 HP）

■奥能登豪雨の被害状況【2025. 9. 24・15時現在】

人的被害（人）

死 者 13（うち災害関連死者 2）

行方不明者 0

安否不明者 0

重 傷 者 1

軽 傷 者 34

住家被害（棟）

全 壊 68

半 壊 590

一部損壊 68

床上浸水 55

床下浸水 470

非住家被害（棟）（半壊以上） 443

避難所の状況

避難所 0 箇所（最大 40 箇所）

避難者 0 人（最大 985 人）

（出展：輪島市 HP）

3 ピースボート災害支援センターの輪島市での活動概要

PBV 初動の動き





2024年1月1日
16時10分頃発生
(マグニチュード7.6)


➢ 1月1日
情報収集開始。緊急支援募金立ち上げ、スタッフ派遣準備を進める

➢ 1月2日
PBV東京事務所、佐賀事務所から、早朝より発電機やガスボンバなどの物資を積み込み出発。各地スタッフが現地入り。被害状況や支援状況を確認

➢ 1月3日～
七尾市、珠洲市、輪島市などを現地調査しながら、緊急支援物資の配布、温かい食事の提供などを開始

➢ 1月5日～
輪島市、珠洲市より要請を受けて、炊き出しなどの支援の申し出を調整し避難所などへ繋ぐ。輪島市では避難所・避難生活のコーディネーションを開始


輪島市 PBVの活動経緯



2024年1月5日～

- 避難所・避難生活アドバイザーとして市内全域の避難生活をコーディネーション
- 各避難所の災害ケースマネジメント等
- その他、直接支援も実施

輪島市避難所リーダーを行政・専門家で支援



災害対策本部

現場

```

graph TD
    Mayor[輪島市長] --- Info[情報共有会議]
    Mayor --- WajimaLeader[輪島市 避難所リーダー]
    Mayor --- Civilian[民間系資源調達 避難所運営のノウハウ提供]
    
    Info --- WajimaLeader
    Info --- Civilian
    
    WajimaLeader --- Admin[行政系資源調達 シフト作成]
    WajimaLeader --- Civilian
    
    Admin --- Support[対口支援団体 避難所リーダー]
    
    Civilian --- Support
    
    WajimaLeader --- Staff1[輪島市職員]
    WajimaLeader --- Staff2[輪島市職員]
    
    Staff1 --- SupportStaff[対口支援団体 職員]
    Staff2 --- SupportStaff
    
    Support --- SupportStaff
    
```

出典：令和7年度前半地域部CADM資料より

輪島市での主な活動

2024年1月5日～現在

避難所の運営支援 避難生活のサポート

輪島市

実 避難所・避難生活アドバイザーとしての対応：
市内全避難所168か所
常駐スタッフによる運営支援：避難所6か所

入浴支援

輪島市

実 利用者数：延べ22,586人
期 運営期間：277日間(5月30日～2月28日まで)

物資支援

輪島市、珠洲市

実 水、食料、発電機、燃料、生活用品、衣料品などの提供
期 提供数：計147,883点(26社1団体によるご協力)

仮設住宅入居者への家電支援

輪島市

実 対象世帯数：4,053世帯
期 提供品目：掃除機、電子レンジ、炊飯器、電気ポット、除湿器、ストーブなど

支援調整窓口の運営

輪島市、珠洲市

実 珠洲市：累計1,688回の調整(衣出し約20万5千食)
期 輪島市：累計2,146回の調整(衣出し約30万5千食、食事・物資160件、心身ケア238件、慰問イベント60件)

- 行政伴走支援
- 情報共有会議の開催・参加
- 企業・団体ボランティアの受入れ、活動内容の調整

■ 避難所運営支援を終えたあとの活動について

約500日間の避難所運営支援を終えたあとも現地に常駐し、避難所の閉鎖は支援の終わりではないという考えに基づき、被災者の次の生活への移行サポートや、地域に根ざした中長期的な支援活動にシフトし、被災者の生活再建に向けた息の長い支援を継続して実施している。

現在の主な活動

仮設家電支援

各種支援調整窓口

地域の方々 ↔ 輪島市 支援調整窓口 (PBV) ↔ 支援者

コミュニティ支援

■仮設家電支援

仮設住宅等に住んでいる方へ、石川県による大型家電3点（テレビ、冷蔵庫、洗濯機）と輪島市が実施する寝具セットの支援と並行し、PBVは小型家電の提供を行うことで次の生活のスタートアップとして必要な生活環境の整備をサポートしている。

■各種支援調整窓口

輪島市から業務委託を受け、市役所内に「各種支援調整窓口」を設置し、県内外から届く多様な支援を、バランスよく各地域へ届けるための調整役を担っている。

■コミュニティ支援

常設型（活動現場を視察）

常設型サロン「まちなの間（ま）」を開設。住民が集いコミュニティ再生のために交流できる場を提供している。

移動型

山間部や海沿いの集落など、特に支援が届きづらい在宅避難の方々へ、在宅避難者の自宅を一軒一軒まわり、区長とつながり、大勢が集まれる場所を把握し、つながれる場づくりとしてサロンを実施している。

コミュニティ支援



常設型

- 2024年5月13日から開始
- 週5日運営
- 1日平均：40人
- 延べ：4,977人

移動型

- 開催場所：市内全域・30か所以上
- 131回実施
- 延べ1,143人参加

地区集会所への備品支援

➢ 対象：公民館、地区集会所、その他（神社仏閣、納屋など）

	合計	公民館	地区集会所	神社仏閣	その他
施設数	128	18	73	28	9
申込数	88	16	41	23	8



■PBV独自の食の支援プロジェクト（活動現場を視察）

FOOBOUR（フーバー）

PBV
ピースボート
災害支援センター

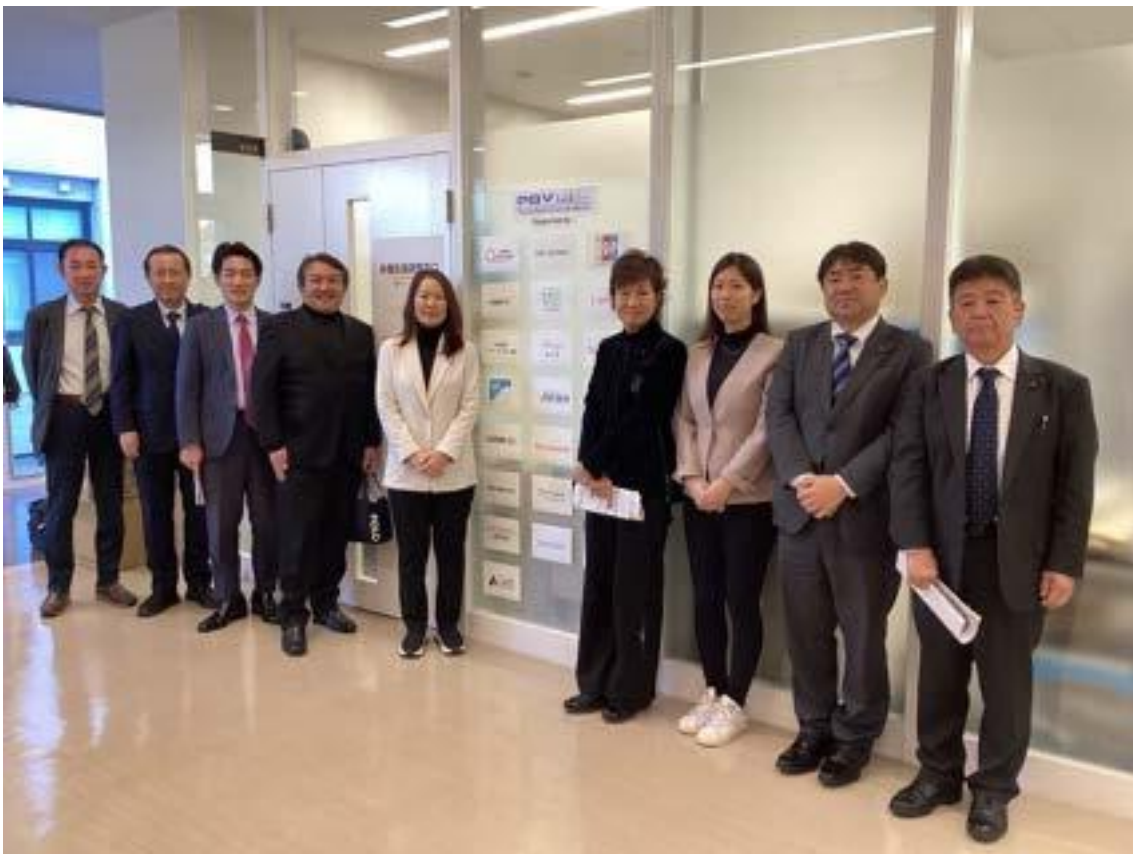
平常時のひとり親家庭支援と
災害時の迅速な食の支援を両立する
フェーズフリー型キッチンカー「FOOBOUR」

平常時

災害時



平時には食品・日用品を24時間取り出し可能な無人車両として
地域のひとり親世帯の支援を実施。
災害時にはキッチンカーとして温かい食料を提供。



輪島市役所内のピースボート災害支援センター各種支援調整窓口前にて

4 輪島市内各地 現地視察

ピースボート災害支援センターの山脇氏、澤田氏に同行いただき、ガイドを受けながら輪島市内各地の被災現場やピースボート災害支援センターの活動現場を視察。

■フェーズフリー型キッチンカー「FOOBOUR（フーバー）」

「いつでも（平常時）どこでも（災害時）食の支援を」をテーマに、キッチンカーを活用して、平常時は、孤立しやすいひとり親家庭などへ24時間いつでも物資を取りに行ける無人の移動型フードバンクとして支援を行い、災害時には、被災地へ迅速な食の支援をするというPBVのプロジェクト。

支援を必要とする人々にとって、食品を手に入れられる「港」となることを目指して、Food（食事）+Harbour（港）を組み合わせ「FOOBOUR」と名づけられた。

能登半島地震では、1月5日にはキッチンカーが現地に到着。翌日から運用を開始し、炊き出しや物資配布が実施されたとの話であった。

現在は、災害で精神的にも経済的にも負担を抱える輪島市のひとり親家庭へ、食品や日用品の支援を行っている。

利用者は、時間や人目を気にせず24時間都合が良いときに、車内に保管されている品を無料で持ち帰ることができる。



FOOBOUR前にて説明を受ける



FOOBOURの外観



FOOBOUR車内

■輪島マリンタウン（輪島港）

能登半島地震による被害がまだ残る輪島港岸壁を視察。



輪島港岸壁にて説明を受ける



地割れ



輪島キリコ会館入口

■市内の各被災現場（車窓視察）

バス移動中の車内にて当時の避難所の様子や各被災現場の説明を受ける。



バス移動中に各被災現場を通るたびに、写真を見ながら説明を受ける



地震によるがけ崩れ



朝市通り



五島屋ビル跡地

■千枚田ポケットパーク（白米千枚田）

景勝地「白米（しろよね）千枚田」が一望できる道の駅。

輪島市白米町にある白米千枚田は、海に面した約4ヘクタールの斜面に1004枚もの小さな田が連なる棚田で、農林水産省の「つなぐ棚田百選」や文化庁の「国の文化財名勝」にも指定されている。

能登半島地震により棚田には幾筋もの深い亀裂が入り、地下水は地上に溢れ、農業用水も土砂や倒木で破壊されるという甚大な被害を受けたが、クラウドファンディングなどを活用しながら復興を進めている。

地元住民とボランティアが協力し、令和6年は約100枚、令和7年は約250枚の棚田で田植えから稲刈りまでを行うことができたとの話であった。

また、千枚田ポケットパークからは、能登半島地震の影響で最大4m以上隆起した海岸線の地形が確認でき、元々海だった場所に新たな国道249号の整備が進められていた。



道の駅千枚田ポケットパークの外観



千枚田ポケットパーク入口及び展望台（一部、近づけないエリア有り）



白米千枚田（千枚田ポケットパーク展望台からの眺望）



被災前の白米千枚田の海岸線



地震により隆起した海岸線



地震により海岸から隆起した陸地に道路整備が進められている



ピースボート災害支援センターの山脇氏、澤田氏と千枚田ポケットパークにて

■まちのの間

PBVが開設・運営している常設型の交流拠点である「まちのの間（ま）」。
視察時には、同所の目の前にある町野町第二団地（輪島市応急仮設住宅）の
住民などが数人集まり、PBVのスタッフを交えて談笑していた。

PBVのスタッフが常時2～3人常駐し、日に約40～50人の方が訪れて
いるとの話であった。



まちのの間の外観



仮設住宅前にて説明を受ける

■もとやスーパー

能登半島地震で被災、照明がつかない中、一度も休まず営業を続けた輪島市町野町（まちなち）唯一のスーパー。ただ、その後の奥能登豪雨では約2メートルの浸水という甚大な被害に見舞われ、休業を余儀なくされた。

しかし、同スーパー本谷代表及び先代の本谷代表の「支えられてきた地域に恩返ししたい」という思いから、奥能登豪雨から18日後に店舗前のテントで営業を再開。さらに、支援物資の供給拠点及び炊き出しの会場として、地域を支援した。そして、多くの災害ボランティアの方々や企業などの助けもあり、奥能登豪雨から2か月後の11月に売場面積を3分の1に縮小した形で本格的に営業を再開したとの話であった。

現在、業態を変えてでも人が集まる場所にしたいとの思いから、現在の店舗を改築し、3分の1をスーパー、3分の2を宿泊施設にし、地元住民と復興や観光などで外部から来た人が融合するスペースも作り、地域を再生させるための拠点とするという「MOTOYA Base（もとやベース）」構想を立ち上げ、クラウドファンディングを実施している。



もとやスーパーの外観



もとやスーパーの店内にて本谷代表より説明を受ける



本谷代表の意気込み



旧店舗スペースにて本谷代表より説明を受ける



地震と豪雨（約2mの浸水）を経ても無事だった奇跡の太鼓

第3部 視察成果のまとめ

各委員の報告

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

委員長 都民ファーストの会豊島区議団・国民民主党 星 京子

■総括的な感想

・6年元旦、石川県能登地方を中心に発生した大規模な地震災害「能登半島地震」の概要と背景、被害、復興状況など、震災から約2年を迎える現状の視察を行い、発災時の対応や、9月に発生した豪雨災害との「複合災害」の影響など、視察を実施して参りました。

・被害の状況は甚大で、二重被災で復旧・復興は追いつかず、人的被害や建物・インフラ被害、津波や二次被害など、復興・復旧は現在も進行中ですが、被災者支援、道路・交通網の復旧、仮設住宅の更なる整備など、被災地域だけではなく、国・地方自治体・自衛隊などが一丸となり災害支援が急務！

また、被災者の生活再建をはじめとして、家屋の再建やまちの復興、地場産業や観光の復興、人口の流出防止や雇用の創出、孤立や孤独死の防止など、本格的復興・復旧は長期的な課題であり、今後も余震や地盤変動に注意しつつ、防災意識を高め、防災強化や地域再生への取り組みが重要である。

■視察先

・石川県珠洲市：珠洲市役所「泉谷 満寿裕」市長、「番匠 雅典」珠洲市議会議長表敬訪問、災害時の対応について説明。

見附公園、珠洲市内被害状況、珠洲市消防団鶴飼分団長、珠洲市宝立小中学校指定避難所本部長講話。

・石川県輪島市：支援団体・公益社団法人「ピースボート災害支援センター」輪島市街地の被害状況、市内・沿岸の被害状況。

■視察の成果

・復興に向けた動きや、行政の課題、減災対策やなど、現地の「生きた情報」を直接伺うことができ、今後の政策や支援のあり方、生活再建や災害関連など、豊島区の防災・震災対策に活かして参ります。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

副委員長 公明党豊島区議団 北岡 あや子

■総括的な感想

石川県能登半島地震から2年が経とうとしています。珠洲市では、復興支援ガイドツアーに参加し、市内の被災地を視察しましたが、今なお色濃く残る被災の爪痕を前に、災害の規模の大きさと復興が長期化する現実を改めて実感しました。

輪島市では、公益社団法人ピースボート災害支援センター現地スタッフの方に同行頂き、発災直後から現在に至るまでの具体的な支援活動や現場が抱える課題について伺いました。いまだ仮設住宅での生活を余儀なくされている方々への継続的な支援、そして地域のつながりや交流をどのように再生していくのか、復興は今も進行形の課題であることを強く感じました。また、土砂災害の被災地も視察し、複合的な災害が復旧・復興の遅れにつながっている現状も目の当たりにしました。

■視察先 石川県能登半島

- ・珠洲市市役所 泉谷満寿裕市長、番匠雅典市議会議長
- ・珠洲市内（見附島、鵜飼海岸、鵜飼商店街、あさひ自主避難所：珠洲市消防団鵜飼分団長高様・宝立小中学校指定避難所本部長多田様等）
- ・輪島市役所内ピースボート災害支援センター
- ・輪島市内（五島屋ビル跡地、健康ふれあいセンター、河川沿い、日本三大朝市の焼失跡地、マリンタウン仮設住宅、沿岸、地域の交流拠点「まちの間」、もとやスーパー等）

■視察の成果

視察を通じ、想定を超える大規模災害においては、自治体の取り組みだけでなく、NPO や民間団体、地域住民など多様な主体が連携した支援が不可欠であることを改めて痛感しました。

トイレトレーラーの協定締結や、空港近くに設置された仮設トイレは、暖かい空調やウォシュレットを備え、被災者の尊厳を守る「質の高い仮設トイレ」であり、その重要性を強く実感しました。あわせて入浴環境の整備も欠かせない重要課題です。

避難所における洗濯・乾燥機を備えた生活環境の整備、さらに災害時に救急車が圧倒的に不足していたという現実についても、現地で具体的に確認しました。食の支援を担う「FOOBOUR」のキッチンカーも視察。豊島区ではキッチンカーとの協定を結んだが、いざという時に実際どのように機能するのか、平時からの運用確認や訓練が重要だと感じました。

既存の協定をより実効性あるものにし、未締結の団体とも迅速に連携・協定締結をすることが重要であり、災害対応力の強化を推進してまいります。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

豊島区無所属元気の会 小林 弘明

■総括的な感想

今回の珠洲市および輪島市の視察を通じて、震災対応において最も重要なのは、発災直後の迅速な初動対応と、日頃から築かれてきた地域のつながり、そして明確な指示系統であることを強く実感した。

珠洲市では、消防団や町会関係者が主体となり、通信が途絶する極めて厳しい状況の中でも、自ら判断し行動することで人命救助や避難所運営にあたっていた。自らも被害者でありながら、それらを遂行することの大変さ、壮絶さを生の声で聴き、改めて胸が締め付けられる想いがした。

また、輪島市では、地域住民と災害支援の専門団体が連携し、避難所運営から復興段階に至るまで、計画的かつ組織的な支援が行われていた。専門性を持つ外部団体と行政が連携することで、被災者の不安を最小限に抑え、復旧・復興を支える体制が構築されている点は、大きな示唆を受けるものであった。

両市の対応は形こそ異なるものの、共通しているのは、「市民の命と生活を守る」という強い使命感と、そのために日頃から備え、連携を重ねてきた姿勢である。特に、町会・自治会への参加や地域内の顔の見える関係づくりが、災害に強いまちづくりの基盤であることを改めて認識した。

豊島区においても、日常の訓練や地域内の信頼関係が、非常時に大きな力を発揮することを現場の生の声から学び、町会・商店街といった地域コミュニティの結束の推進の重要性を胸に刻んだ。

■視察先

珠洲市（見附島、鵜飼海岸、宝立小中避難所、鵜飼商店街、あさひ自主避難所）

輪島市（公益社団法人ピースボート災害支援センター）

■視察の成果

- ・町会等地域の自助組織への加入率の大事さが改めて浮き彫りとなった。
- ・自衛隊、企業、県との連携要請の迅速さ、日頃の避難訓練の参加促進など、震災直後以後を見据えた基礎的な部分でのオペレーション確認・準備の徹底が重要であると再認識をした。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

自由民主党豊島区議団 井上 幸一

■総括的な感想

珠洲市見附公園では津波の跡、沈下の状況を確認し、見附島の崩落と、見附島までの石道も姿を変えていたのを見ると大自然の計り知れないパワーを感じ、どれほど強い地震だったか、想定をはるかに超えていたと思います。鵜飼海岸では地形変化でマンホールが隆起したようになっており、地盤沈下したことにより海水が川に逆流して、よどんでいる河口付近を確認しました。啞然として言葉もありませんが、これからどうなってしまふのだろう？と思いました。あさひ自主避難所で消防団分団長、避難所本部長の講話は当時の現場の生の声ですので迫力があり首都直下型地震が発災したら避難所はこのようにして運営できるのだろうか？不安な気持ちになりました。珠洲市長の危機管理の講話も同じように当時現場の生の声で迫力があり、臨場感が伝わってきました。

輪島市役所にて支援団体、公益社団法人ピースボート災害支援センターの講話で発災当初から日々の生活で被災者を支えて避難所閉鎖、その後の仮設家電支援、各種支援調整窓口、コミュニティ支援など終わりがなく忍耐強いと思いました。線状降水帯による豪雨被害で泥水が家屋に流入したり、家そのものが流されたり原状回復できない状態が多くあったように思いました。いずれにいたしましても珠洲市、輪島市における復興はまだ遠いと私は感じました。

■視察先

石川県珠洲市見附公園 珠洲市内各地 珠洲市役所
石川県輪島市内各地 ピースボート災害支援センター

■視察の成果

豊島区でも毎年行っていますが避難所開設訓練の重要性が大きいと感じ、ありとあらゆる場面を想定し備蓄品をそろえ日々の生活になるべく支障がないようにする事が大切だと思いました。また、実際の体験を見たり聞いたりするのは知識を与えてくれて同じ消防団員として尊敬に値します。豊島区内の消防団員のレベルアップが急務と感じ幹部会議、分団会議、防災訓練を通じて新しい知識を習得することが大切だと思いました。講話の中で町会、自治体の加入率が100パーセント。加入しないなんてそんな恐ろしいことは考えられない…という話がありました。豊島区では町会加入率が40パーセント程度…いろいろと考慮してもやはり町会加入を推進すること、地域コミュニティの充実が大切だと再認識させられました

■その他

12月の年末多忙な時期にもかかわらず豊島区議会令和7年防災・震災対策調査特別委員会行政視察を快諾して下さいありがとうございました。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

維新・無所属の会 ふるぼう 知生

■総括的な感想

能登半島地震において最大級の被害を受けた珠洲市と輪島市を二日間にわたって視察しましたが、バスで移動しながらの説明や現地での詳細な説明など、時間を有効的に活用した充実した内容となっており、輪島市が故郷である私にとっても、多くの学びを得る場となりました。

支援団体から派遣され、一年以上にわたって支援に入っている方々のお話であったり、被災地の消防団分団長の近隣住民の命を救うための、命がけの行動だったり、避難所の開設・運営時における混乱状況の中での、指導者の力強いリーダーシップだったり、珠洲市長の政治家としての想いや当時の行動等が強く印象に残っています。

■視察先

・石川県珠洲市

見附島、鶴飼港岸、宝立小中避難所等

・石川県輪島市

朝市通り、マリンタウン仮設団地、千枚田ポケットパーク、
町野町もとやスーパー等

■視察の成果

公費解体に目途がついたとはいうものの、まだまだ復旧の段階であることを実感しました。また、発災時における、市長や行政及び議会、議員の役割、なすべきことについて総合的に理解をすることができた。

災害があるたびに新たな問題点がクローズアップされますが、今回の能登半島地震においてはトイレの環境整備が話題となりました。「備えあれば患いなし。」想像力を豊かにし、少しでも避難所の生活環境をより良くするために、事前の準備をしておくことが重要であると実感しました。

■その他

現地の方々のお話から判断すると、復旧のスピードには市長の政治的バックボーンの有無が関係しているということもあるようです。政治の力というものが良い方向に発揮されればと願いました。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

自由民主党豊島区議団 藤澤 愛子

■総括的な感想

【1日目の珠洲市】

地震の影響で崩れてしまった見附島からはじまり、津波の被害が大きく、地盤が沈降した海岸沿いの地域を視察しました。

消防団や地域住民の方々の自主的な救出活動と避難所開設・運営のお話を伺い、いざという時の決断力や住民の団結力の大切さを強く感じました。

泉谷市長や危機管理室の室長からも直々に当時の様子を伺うことができ、発災後のリアルな動きを想像することができました。

【2日目の輪島市】

民間団体が市役所に常駐して震災対策にあたるのは珍しいと感じましたが、職員数が少ないためPBV(ピースボート災害支援センター)の協力を得ているとのことでした。

地方からの派遣職員、また現地採用の職員の方々が仲もよく活動されており、自身の家庭もある中で復興に向けて全力で活動する姿に感動しました。

1日バスで輪島市を回り、地震により4mほど隆起をして今まで海だったところに新たな土地ができている様子や様々な仮設住宅、地震と同年9月の豪雨災害により、大きな崖崩れが起きている山を視察しました。

「条件が厳しくなかなか業者が決まらないため復興があまり進んでいないように見えるかもしれませんが、着実に一步步復興している、頑張っている」との現地の方々のお話を伺い出来る限りの支援をしていきたいと強く感じました。

■視察先

珠洲市・輪島市

■視察の成果

能登では広い土地があるため瓦礫の処理や仮設住宅の建設、新しい住宅等の建設ができますが、豊島区で大きな震災が来た際には復旧作業を行うためのスペースを確保することがまず大変だと感じました。

大きくまちが壊れると、「どのようなまちにしていきたいか」から話し合う必要があり、また住民それぞれが「どのような暮らしをしたいか」今一度考える必要が出てくるため日ごろから家族で話し合ったり、自治体でできる限りの訓練を行っておくことが必要であると感じました。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

公明党豊島区議団 西山 陽介

■総括的な感想

能登半島地震及び奥能登豪雨（同年 9 月）により、同一年に二度の大規模災害を経験した地域であり、復旧・復興が今なお途上にある現場を確認し、行政・支援団体・住民から複合災害の実態と課題を直接伺う貴重な機会となった。

特に、断水・停電・通信途絶や道路寸断等により、発災直後は「どこに、何人が避難しているのか」という把握自体が困難であったこと、庁舎も避難所となり限られた人員で対応せざるを得なかったことなど、机上では捉えきれない実情を学んだ。

また、「避難所が閉所しても支援が終わるわけではない」という視点は、災害関連死の防止や生活再建支援の重要性を改めて示すものであり、被災後の中長期支援を含めて備えを構築する必要性を強く認識した。

本区においても本視察で得た教訓を、初動体制、避難生活支援、職員体制、外部支援受入、復興・見守り支援に反映し、区民の命と生活を守る防災施策の強化につなげていく必要がある。

■視察先

（1）石川県珠洲市

- ・珠洲市内（復興支援ガイドツアーによる現地視察）
- ・同（珠洲市消防団鶴飼分団 高分団長、宝立小中学校指定避難所 多田本部長による、災害初期の対応と避難所運営について説明聴取）
- ・珠洲市役所（泉谷市長、番匠市議会議長 表敬）
- ・珠洲市危機管理室（女田危機管理室長より、能登半島地震及び奥能登豪雨災害時の対応等について説明聴取・質疑）

（2）石川県輪島市

- ・ピースボート災害支援センター（PBV）より、輪島市における支援活動及び被災地の実態について説明聴取・質疑
- ・輪島市内各所（被害状況、仮設住宅、沿岸部・市街地等の現地視察）

■視察の成果

（1）危機管理拠点の集約と意思決定の迅速化

珠洲市では、市長・副市長が危機管理室内で執務し、国・県等のリエゾンを同室又は隣接室に集約することで、情報集約と意思決定、調整を迅速に行ったとの説明があった。発災直後の混乱時において、指揮命令系統と情報の「集約」が機能することの重要性を確認した。

（2）通信・電源・燃料の確保が「初動」を左右する

停電により固定電話が不通となり、携帯基地局もバッテリー切れで不通となるなど、通信途絶が初動を大きく制約した。衛星電話は一定の役割を果たす一方、同時利用や使用条件に課題があり、

その後スターリンク配備により、複数人の同時通信が可能となった点は示唆的である。併せて、市役所自家発電の燃料確保等、燃料の手当が重要課題であることを学んだ。

(3) 避難所運営は「開設初期」と「長期化」で課題が変化する

珠洲市では、指定避難所以外にも地区集会所や倉庫等が避難先となり、当初は避難者の所在把握自体が困難であった。避難所は、初期の衛生（トイレ等）・物資、長期化に伴う健康悪化や孤立など、フェーズに応じた支援が必要である。これらは本区における救援センター・在宅避難の設計に直結する論点である。

(4) 応援職員・外部支援の受入は「受け皿」が必要

珠洲市では多数の応援職員が派遣され、業務が広範に及んだ一方、業務場所や寝床の確保が不足し、廊下等での仮眠を余儀なくされる実態があった。派遣を有効に機能させるには、平時からの受入体制（配置、宿泊、動線、引継ぎ、指揮命令系統）を標準化する必要性を確認した。

(5) 複合災害は復旧・復興を「再び後戻り」させる

地震後に豪雨災害が重なったことで、復旧途上の地域に追加の被害が生じ、復興の負荷が増大したとの説明があった。災害は単独ではなく連続・複合で起こり得ることを前提に、BCPや備蓄、復旧計画の立案が必要である。

(6) 民間支援の強みと、行政との連携の重要性

輪島市ではPBVが避難所・避難生活アドバイザーとして避難所支援を実施し、食支援、物資調整、コミュニティ支援などを継続しているとの説明があった。発災直後の緊急支援に加え、仮設・在宅期の見守りやコミュニティ再形成支援が重要であり、行政と民間支援の協働設計が不可欠であることを学んだ。

■その他

(1) 本区への反映に向けた検討事項

- ・通信・電源の多重化（衛星通信・スターリンク・充電設備等）及び燃料確保の事前協定
- ・避難所開設初期の衛生対策（凝固剤簡易トイレ等の備蓄・配備手順の明確化）
- ・在宅避難・自主避難（があった場合の）を含めた避難者把握と物資供給ルートの整備
- ・応援職員受入の標準化（宿泊・動線・業務配置・引継ぎ・執務スペースの確保）
- ・災害関連死防止を含む中長期支援（見守り、健康・福祉の連携、心身ケア）の体制整備
- ・災害廃棄物（仮置場確保、広域処理等）に関する事前準備

(2) 謝意

珠洲市・輪島市の関係者の皆様、ピースボート災害支援センターの皆様、また現地で案内・説明をいただいた方々に対し、復興過程の貴重な知見をご提供いただいたことに深く感謝申し上げます。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

都民ファーストの会豊島区議団・国民民主党 中澤 まさゆき

■総括的な感想

令和6年能登半島地震・令和6年奥能登豪雨、被害の現地視察を通じて、報道だけでは把握しきれない被災の深刻さを実感した。住宅の倒壊や道路の寸断により、日常生活が大きく損なわれている現状を目の当たりにし、被災者の方々が今もなお不安の中で生活されていることを強く感じた。また、長期化する避難生活による心身への負担の大きさも改めて認識した。

■視察先

石川県珠洲市 見附公園・市内現地視察・珠洲市役所
石川県輪島市 市内現地視察・ピースボート災害支援センター

■視察の成果

視察を通じて、災害発生直後だけでなく、その後の生活支援や地域コミュニティの維持が重要であることを再認識した。特に、高齢者や要配慮者への支援体制、避難所環境の改善、情報伝達の在り方など、今後の防災・減災対策に活かすべき課題が明確になった。

また、仮設住宅の立地や支援制度の周知不足など、現場でしか把握できない課題を確認できたことは大きな成果であり、今後の防災計画や支援施策の見直しに反映していきたい。

■その他

石川県の地震被害の現地視察を行い、被害の深刻さと復旧・復興の難しさを実感した。特に、避難生活の長期化や支援の届きにくさといった課題を直接確認できたことは大きな成果であり、今後の防災対策や被災者支援の充実に活かしていきたい。

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

日本共産党豊島区議団 垣内 信行

■総括的な感想

震災から約2年が経過したものの、現地視察して、これまでの復興状況は、情報よりかなり遅れていると感じました。地盤沈下によって飛び出したままのマンホール、倒れたままの電柱、崩れたままの山肌など震度7の直下型地震の恐ろしさを痛感しました。これに加えて、今年の豪雨水害はさらなる被害をもたらし、輪島市、珠洲市の住民に絶望感を与えたものと改めて思いました。

しかし、これに負けず、市民とボランティアと行政が一体となり、復興を目指し日々努力している姿を見て、マンパワー、人と人との絆の大切さを感じた視察でした。

同時に災害を機に住んでいた街から移転し、生産年齢人口が減少、高齢者率がより高まり、今後ますます過疎化が進みつつある被災地に対し、支援をさらに広げていく必要性を感じました。大都市に今後予想される大地震にいかすことは何なのか、さらなる対策をすすめるよう議会としても研究すべきと感じました。

■視察先

一日目 石川県珠洲市

- ① 珠洲市内各地
- ② 珠洲市役所

二日目 石川県輪島市

- ① 輪島市役所 ピースボート災害支援センター
- ② 輪島市内

■視察の成果

珠洲市、輪島市ともに大災害が起きた際の初動がいかにかに人の命を救うかを改めて学びました。特に隣近所の絆による安否確認。とっさの判断で扉を開け、倒壊した家からの脱出、火災を防ぐ手立てを行った話などは感動しました。

両市とも人口割に対する予算が膨大な規模です。財源は、国庫補助金と市債です。今後の復興をすすめるうえで、国や県などからの財政支援は不可欠であり、さらなる拡充が求められていると感じました。復興については、輪島市の公益社団法人ピースボートの果たす役割は大きく、支援を支えるボランティアの育成、平時の時の活動の積み重ねが災害を乗り越える力になることを改めて学びました。

■その他

今回の視察は、大変有意義な視察になりました。受け入れと視察に協力いただいた皆さんに感謝申し上げます。

視察行程

【12月18日(木)】 -1日目-

8 : 5 5 発 羽田空港
↓ 移動 (ANA 7 4 7)
9 : 5 5 着 能登空港
10 : 1 5 発
↓ 移動 (貸切バス)
12 : 2 0 着 見附公園駐車場 (視察1)
12 : 3 0 ~ 珠洲市内各地 (現地視察)
↓
15 : 1 0 発 あさひ避難所
↓ 移動 (貸切バス)
15 : 2 0 着 珠洲市役所 (視察2)
15 : 3 0 ~ 珠洲市役所 危機管理室 (座学)
↓
17 : 3 0 発 珠洲市役所
↓ 移動 (貸切バス)
19 : 3 0 着 宿泊先

【12月19日(金)】 -2日目-

8 : 1 5 発 宿泊先
↓ 移動 (貸切バス)
9 : 4 5 着 輪島市役所 (視察3)
10 : 0 0 ~ 公益社団法人ピースボート災害支援センター (座学)
↓ 輪島市内各地 (現地視察)
16 : 0 0 着 能登空港
16 : 5 5 発
↓ 移動 (ANA 7 5 0)
18 : 0 0 着 羽田空港 解散

令和7年度

防災・震災対策調査特別委員会視察報告書

令和8年1月発行

<発行・編集>

豊島区議会

住所：豊島区南池袋2-45-1

電話：03-3981-1111（代表）